(35)

氏名(生年月日)　高安俊介（タカヤス シュンスケ）
本　　籍
学位の種類　医学博士
学位授与の番号　乙第 257号
学位授与の日付　昭和51年11月19日
学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目　**Ebstein 病の血行動態に関する研究**
論文審査委員　（主査）教授　広沢弘七郎
（副査）教授　織畑　秀夫，教授　松村　義寛

## 論文内容の要旨

研究目的

Ebstein病は比較的稀な心奇形で，その臨床像は多様であり，患者により，重症度や予後は全く異つている．近年に至り，患者の分類が試みられているが，必ずしも明確なものではない．そこで，本症に対する手術適応の決定や，予後の判定の基準となるべき臨床的分類を確立すべく，当研究所の症例を主として血行動態の面から検討した．

研究対象および研究方法

当研究所およびその関連病院に入院した Ebstein 病患者の内，手術，剖検または心血管造影のいづれかにより，診断の確定した27例を選び，これらの臨床，手術および剖検所見を検討した．

研究結果および臨床分類

1）三尖弁狭窄症優位型

自覚症状が強く，チアノーゼがあり，胸部X線上中等度心拡大がみられたものは8例であつた．この内，右心カテーテル検査を行つた7例中5例に右心房，右心室間の拡張期圧差がみられた．また，心血管造影を行なつた7例全例に，右心室流出路の拡張を示すdouble-ball signがみられた．剖検を行つた3例では，三尖弁が高度に変形しており，狭窄がみられた．

2）三尖弁閉鎖不全症優位型

3症例に，手術あるいは剖検で，強度の三尖弁閉鎖不全を生じていたと思われる三尖弁の変形が確認された．これらの症例は，いずれも強度の心拡大を有しチアノーゼがあり，心カテーテル検査および心血管造影を行つた2例では，巨大な右心房v波と double-ball sign がみられた．この3例に臨床所見が似ている1例を加え，4例をこの型に分類した．

3）軽症型

残りの症例の内，5例ではチアノーゼと自覚症状が全くなく，他の5例では軽い自覚症状を有するもチアノーゼがなく，他の3例では，チアノーゼも症状も軽度であり，この13例を1つの型に分類した．これらの症例は，軽度から中等度の心拡大を有しており，3例を除き拡張期の右心房，右心室間の圧差はなく，1例を除き double-ball sign を欠いていた．

尚残り2症例は分類が不可能であつた．

考　案

各病型の血行動態について検討すると，三尖弁狭窄症優位型では，強い三尖弁狭窄の存在により，右心房の血液の機能的右心室への流入が妨げられ，右心室の拍出量が低下し，静脈血は左心房に短絡する．

三尖弁閉鎖不全症優位型では，三尖弁の面積の不足により，強い閉鎖不全が生じ，大量の血液が右心房と機能的右心室との間を往復し，これによる容量負荷のために，右心房と機能的右心室の強い拡大が生ずる．右心室の拍出量は比較的良好に保たれており，症状は軽度である．

軽症型では，三尖弁機能が良好であり，右心室の拍出量は充分で，臨床的にチアノーゼは無か，あつても軽度である．

以上，本症においては，主として三尖弁機能が血行動態に影響を与え，個々の患者の臨床像を決定しているものと思われる．

# 論 文 審 査 の 要 旨

Ebstein 病は比較的希な先天性奇型であるが，その平均寿命は約35歳といわれ，比較的長命者が多い．しかし乍ら個々の症例により病型，重症度の差があり，予後の判定に違いが出て来る．本論文は，確認された27例の Ebstein 病につき一般臨床事項をまとめ，更に心臓カテーテル検査，心血管造影，手術所見，剖検所見を充分に組合わせ，主として三尖弁の機能に基づく血行動態の違いについて分類したもので，本疾患の臨床像，手術適応等につき示唆するところが多い論文である．心臓病学に貢献することの多いものであると認める．

**主論文公表誌**

Ebstein 病の血行動態に関する研究．

日本胸部外科学会雑誌　第23巻　1391頁（昭和50年12月10日）

**副論文公表誌**

1）心房中隔欠損を伴わない部分的肺静脈還流異常．
心臓　3　677（昭46）

2）Ebstein 病の臨床分類．
心臓　4　395（昭47）

3）Ebstein 病の手術適応と術式の選択．
心臓　5　211（昭48）

4）左冠状動脈肺動脈起始症の1治験例．
心臓　6　1619（昭49）

5）Ebstein 病の7症例．
心臓　7　439（昭50）